

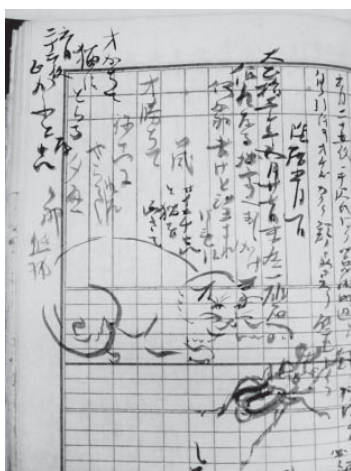
■発行／南方熊楠顕彰会 〒646-0035 和歌山県田辺市中屋敷町36番地 TEL0739-26-9909 FAX0739-26-9913
http://www.minakata.org/ 〈E-mail〉 minakata@mb.aikis.or.jp

自筆資料に見る南方熊楠…………… 23

南方熊楠と猫

文／杉山 和也（青山学院大学大学院博士後期課程）

南方植物研究所設立に向けて、東京に滞在し募金活動を行っていたころのこと。南方は毎日新聞の記者・末広一雄の求めに応じて俳画を描いている。当時の日記の巻末部分には、その下書きとおぼしきものが見受けられ、句を推敲した跡が認められる（【図1】）。この箇所を翻刻すると次の通りである。



【図1】1922（大正11）年日記、巻末雑記、393頁【自筆274】

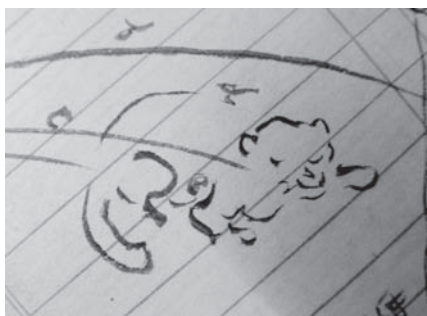
大正拾陸年五月廿七日、末広一雄君、銀座なる拙寓へおしかけ、何がな書けと望まれければ、サイカチ虫と猫を画き

才勝ちて ねこにやらるゝ 夕へかな

才からず 猫にとらるゝ かふと虫
六月二十二日夜正

句の解釈については、『熊楠と猫』（共和国、今年4月刊行）第4章の伊藤慎吾氏による解説に譲るが、末広に贈った絵は小畔四郎が「実に近代の大傑作」（同年12月16日付小畔四郎宛書簡）と評し、さらには漫画家・北沢楽天が「神品」（同年11月10日付小畔宛書簡）とまで絶賛しており好評であったようだ。得意になっていたであろう南方自身も「実に一生の絶品」（同年12月19日付小畔宛書簡）と、文字通りの自画自賛をしている。日記によると5月29日にはこの絵を中山太郎、折口信夫ほか7人（郷土研究会員）に披露し、30日になってやっと末広に贈っている（以上、『熊楠と猫』第3章、参照）。もしかすると、渡すのが少し惜しかったのかもしれない。

この時の絵の原本は現在、所在不明であるため、幻の逸品というべきものだが、最近、この時期に描いたと見られる絵をもう一つ新たに発見した（【図2】）。岸本昌也氏によると、同年6月6



【図2】1922（大正11）年日記、巻末雑記、396頁【自筆274】

日の日記に「木村仙秀氏へ猫とカブトムシを画くに久しく間とる」、6月23日の日記には「カブト虫のかげ水にうつれるを猫見る所」の絵を描いて「六鶴氏来る（中略）予眠くてそのまゝ前刻かきしカブト虫の画与へ眠りおは



【図3】猫とカブトムシの俳画と関係がありそうなスケッチ【自筆548】

る」とあるため、猫とカブトムシをモチーフとした俳画を南方は度々描いているようである。先に挙げた翻刻に「六月二十二日夜、正（す）」として、末広に俳画を贈った後で、句を推敲し直しているのも、このあたりの事情によるのであろう。今回、発見した絵が、そのどれに相当するのかは分からないが、猫のポーズは【図1】と近い。1923（大正14）年1月には、自宅の愛猫に連日同じポーズを取らせて同じような絵をあちこち描いているが（『熊楠と猫』第3章、参照）、カブトムシと猫の絵も同様に何度も描いていたのであろう（【図3】）。

「小生は天性するき人間にて、人にやる積りでかきては満足なもの出来ず（出来たるは末広君に贈りし猫の画位いのものに候。それすら戯書を書加へ大に氏の不興を催ほせり）」（1924（大正13）年10月27日付、小畔宛書簡）。つまり、猫の絵についても、基本的には南方旧蔵資料の中にこそ熊楠の自慢のものが遺されているということになりそうだ。南方熊楠顕彰館はその意味においても宝の山だろう。今後も何か魅力的な絵を見つけては、世に広く紹介して参りたい所存である。

CONTENTS

第28回南方熊楠賞 授賞式	…2
南方熊楠賞受賞記念講演 櫻井 治男	…3
第11回 熊楠ゼミナール基調講演 池澤 夏樹	…11
第39回 熊楠をもっと知ろう！講演会 橋爪 博幸	…16
第39回 熊楠をもっと知ろう！講演会 杉山 和也	…20
第39回 熊楠をもっと知ろう！講演会 志村 真幸	…23
第40回 熊楠をもっと知ろう！講演会 松居 竜五	…26
第40回 熊楠をもっと知ろう！座談会 赤堀展也・岸本昌也・志村真幸	…32
南方熊楠生誕150周年をふりかえって 武内 善信	…40
南方熊楠研究会 夏期例会報告 松下 恵子	…42
書評・新刊紹介 嶋本隆光・広川英一郎	…45
第51回 月例展のご案内	…47
書簡の杜（十九） 岸本 昌也	…48
【追悼】中瀬喜陽先生 中瀬雅夫・吉川壽洋・濱岸宏一・大澤茂男 飯倉照平・武内善信・松居竜五	…50